
百輪の華

工藤 円

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百輪の華

【Nコード】

N7096F

【作者名】

工藤 円

【あらすじ】

容姿端麗頭脳明晰、女にモテる事こそを男の至高とする最強の美男子、持貫玉^{もちぬぎひかる}。両手両足、全ての指を使っても抱えきれない程の華を携えながら、モテ神として一生を歩む男の物語。

第1輪『愛の華』

俺の名前は持貫^{もちぬぎ} 玉^{ひかる}、十六歳。容姿端麗頭脳明晰、誰にでも優しく微笑ましく。名前を挙げれば誰もが知ってる学校一のモテ神だ。

『男として生まれたならば、人生に華欠くことなかれ』。これは将来、俺の自伝が出版される時用に考えてある格言だ。恐れ入ったか。

第1輪『愛の華』

「持貫くん！」

今日もまた、登校するなり女生徒の奴らが黄色い声を浴びさせてくる。

「おはよう」

俺様は性格も良いので、こんなお世辞にも可愛いとは言えない連中にも優しく接する。聖母マリアも裸足で逃げ出す人格の良さだ。

校門を通つても、階段を上がったも、廊下を歩いてても、俺の周りには女が耐えない。これこそが、男として生まれた者の至高の人生。

「持貫くん、今日もかつこいー！」

「いやいや……。そんな事無いって」

最早、俺以上の人生が存在するなど考えもつかないね。全人類対象人生ランキング一位だ、一位。

「あいつ、持貫くん！！」

その時、突然後ろから声を掛けられた。

「ん？ どうしたの？」

真っ赤に染まる頬、俯いた瞳。

（あー……、告白だな。それにしても、恥ずかしくて目も合わせられないとは好印象な女だ）

「あ、あのっ……」

「ん？」

俺はこの女の心情を十二分に理解した上で、優しく微笑む。

「ず、ずっと好きでした！ 付き合ってください！」

女はそう言って頭を下げた。

（だろうな……。しかし、朝とは言えこんな人目のある所で……）

「えっ！？ ちよっ、ちよっと……」

俺は、慌てた振りをして女に頭を上げさせる。

「……ほ、本気で？」

俺は自らの意思で頬を赤らめた。この技術も、習得するのに苦労したものだ。

「は、はい！ 本当に持貫くんの事が好きで好きで……」

「ちよ、ちよっとさ、場所変えて話さない？ ほら、ここ人目にくし……」

そう言つと、その女は一層頬を赤くした。

「あっ……、ごめんなさい！ そこまで考えてなくて……」

「いやいや、それは全然良いんだけどさ。とりあえず、移動しよ？ 考えろ。役立たず。」

「はっ、はい！」

そうして、俺は女の腕を引き屋上へと向かう。生徒は屋上へ上がる事は出来ないが、その直前にはちよっとしたスペースがありそこなら人目につかない。

「ごめんね。わざわざ移動させて」

「いつ、いえ！ 悪いのは私ですから！」

なんだ。ちゃんと分かってたか。もし『いえ、気にしないで下さい』なんてぬかしやがったら殴り飛ばしてるところだ。

「それで、さっきの告白なんだけど……」

「はっ、はい……」

俺は一拍置いて言葉を溜める。

「是非。こちらこそよろしく」

俺は満面の笑みを作り、微笑んだ。

「えっ、本当ですか!？」

「うん。俺今付き合ってる人とかいないしさ。君、結構本気で俺の事想ってくれてるばいし」

「はっ、はい! それはもう……誰よりも!」

おい。図に乗るな。お前以外にも何万人が俺に夢中になると思ってる。

「それじゃ、これからよろしくね」

「はい!」

女は嬉しそうに、目元には微かに涙すら浮かべながら笑った。

(フフ。嬉しいだろうな)

「えっと……それじゃ、とりあえず名前教えてくれるかな?」

俺はそう言って携帯を取り出す。

「あっ、そうですよね! えっと、赤外線で私のプロフィールを送って良いですか?」

「あっ、そうしてもらえる? じゃあ、是非」

二つの携帯を向け合うとすぐに通信は済み、俺の携帯のアドレス帳には新たに一つ名前が増えた。

三浦 美穂

「ふーん。三浦美穂」

「はい。えと……出来れば、美穂って呼んで下さい……」

(……なんか、本当に拍子抜けするぐらい現代の女子高生とは思えないな、こいつ)

「わかった。じゃあ、美穂も俺の事は玉って呼んでね」

「う、うん！　じゃあ、また後でね！」

そう言つと、三浦は階段を駆け下りて行った。

「……………」

俺は、携帯のアドレス帳を開く。

『三浦　美穂の登録カテゴリー変更』

その他、友達、女友達、先輩（男）、先輩（女）……等、沢山の
カテゴリーがある中で俺は三浦美穂の登録先を選び出した。

“彼女”

その中には大勢の女の名前が並び、三浦美穂もまた、その内の一
人となる。

「……………」

俺は堪えきれずに、笑みを零した。

第1輪『愛の華』（後書き）

新連載です。

やる気が沸いてます。

今回の作品は、サブタイトルの数え方を第 輪としています。

花を数える時の一輪、二輪の輪です。

もし物語が100話まで進んでそこで完結を迎える事となれば、第

百輪『 』てな感じで、凄くカッコイイのにな。

100話まで続くかな。続けられるかな。

無理だろうな。

第2輪『魅惑』

「……えっ？ 付き合ってること秘密にするの？」

美穂は戸惑った様に顔を歪ませた。

「うん……嫌かな？」

「嫌って訳じゃないけど……どうして？」

美穂は明らかに、不安さを顔に滲み出す。

（フフ、分かるぞ三浦。俺がこう言つと、女はどいつもこいつも不安そうな顔をする）

「だって、俺らもそろそろ受験勉強に臨まなきゃいけない時期だしさ。周りから色々言われたくないんだ。それに……」

「……それに？」

俺は間を溜めて、意図的に言葉を詰ませた。

「……周りの人に俺らが付き合ってるって知られたら、恥ずかしくて美穂と人前で話せなくなるよ……」

俺がそう言つと、美穂はみるみる頬を赤らめる。

「そっ……そそ、そうだよね！ 私も持貫くんと付き合ってるって知られたら緊張しちゃうし！ わかった、誰にも言わない！」

「ほんと？ ……それで良いかな？」

「うん、大丈夫！」

「ありがとう」

俺は優しく微笑みかける。

第2輪『魅惑』

「玉……！」

自分のクラスへと向かう途中。交際中の女子の一人に呼び止めら

れた。

「何？」

二年一組、小杉^{こすぎ}まり 万里。今のご時世、なかなかお目に掛かる事のないヤンキーの様な鋭い瞳。がさつな口調。三浦美穂とはまるで正反対の女だ。

ただ、しっかりと調教した甲斐あつて俺と話したい時にはちゃんと人目につかない様な場所を選ぶようになってる。その点、あの三浦という女にもしっかりと教え込まなくては。

「何なのよ。今の女」

ちっ……。見られてたか。

「いや、またちよつと告白されちゃってさ。大丈夫、ちゃんと断つたから」

「……ほんとだよ」

「ほんと」

俺は輝かしい笑顔を作り出す。

「……なら、信じるけどよー……」

万里は渋々とその歯牙を納める。

「もう、本当だってば。どうしたんだよ急に？」

「別に。……ただちよつと不安でさ」

「不安？」

「あー、うー……。玉、結構モテるからさ……」

“結構”だと？ ふざけるな。

「いや、そんな事は無いけど……」

「モテるんだってば！ 玉は気付いてないかもしれないけど……！」

涙まで浮かべて、俺を他の女に取られはしないかと心配する女。

…… 良いものだ。

「おいおい、今更何言ってるんだよ。俺が好きなのは万里だけだ」
俺は万里の両肩を掴み、顔を近づける。

「……、信じるけどさあー……」

それでも万里は不満そうに、顔を逸らした。

「……………万里」
「何…………？」

涙目で俯く彼女の顔を無理矢理上げさせ、そのつむんだ口に唇を重ねた。

「俺は地球上の何よりも、万里だけを愛してる。前にそう言っただろ？」

「うん」

万里の顔が真っ赤に火照る。これを見るのが何より楽しい。

「玉……………」

「何？」

「愛してる。マジで」

万里は恥ずかしそうに視線を逸らしながら、投げ捨てる様にそう言い放った。

「フフ、俺もだよ」

俺が満面の笑みでそう言うと、万里の頬は一層赤みを増す。

「わっ、わざわざ呼び止めて悪かったな！　じゃーな！」

万里は両手で頬を覆いながら、その場から走り去った。

「……………チッ」

（あいつ、相変わらず唇乾燥してんなー。女ならリップぐらい塗っとけや）

俺は、走り去る万里の後姿を眺めながら、制服の袖口で唇を拭いた。

第3輪『酸い葡萄』

昔々、あるぶどう畑で一匹のキツネがたわわに実ったおいしそうなブドウを見つけました。

キツネは是が非でも食べてみたいと跳び上がりますが、ブドウの房はみな高い所にあり、届きません。

何度跳躍してもついに届かず、キツネは怒りと悔しさで、「どうせこんなぶどうは、すっぱくてまずいだろう。誰が食べてやるものか」と捨て台詞を残して去ってゆきました。

第3輪『酸い葡萄』

昔親に読まされた、下らないキツネのイソップ童話。

自分の欲しいものが手に入らなかったからと言って、聞くに堪えない棄て台詞と負け惜しみを吐いて去っていく。

「……………」

俺にこんな話は必要無い。俺は溜息をつき、唐突な思い出を掻き消した。

「持貫くん」

俺は机についた肘を倒し、顔を上げる。

「何？」

「クラス会のアンケート、持貫くんだけまだなんだけど。早く出してくれないかな」

……………内海博子。うつみひろこ クラスの学級委員を自ら進んで務める様な、生まれついでのカタブツ女。多分、俺はこの女の笑った姿を見た事が無い。

「あつ、ごめんごめん。ちゃんと出すから」

「持貫くん、毎回そうやって言うけどさ。結局全然出してくれないよね。参加したくないなら別に参加してくれなくて良いんだけど」
こ、このアマ……………！！

良く見れば綺麗な顔をしている癖に、この腐りきった性格と上から目線で物を申す鋭い声色の所為で男はほとんど寄り付かない。

「ごっ、ごめん。今日の放課後までには書くからさ」

「よろしく」

そう言うのと、内海は淡々と自分の席へと戻っていった。

（あの糞女…………）

しかし今は内海への怒りに震えていても、授業を受けている間にそんな事は薄れ、放課を迎える頃にはすっかり忘れ去ってしまった。

「あ…………あ、疲れたっつと」

放課後、特別区域の掃除を終えた俺は一人で教室に戻ってきた。

（え〜と、今日はまず万里にメール返して…………その後綾香と電話かな）

俺は鞆を取るため、教室の扉を開く。

「！ 内海！」

窓から夕焼けが差し込む中、一人で佇む内海の姿が目に入った。

「持貫くん。アンケート、書いてくれた？」

（うわ、やばっ！）

「あっ、いやあと少しだから！　すぐ書きちゃう！」

俺は慌てて鞆の中からアンケート用紙と筆箱を取り出し、机に向かう。

「…………別に、もう良いよ」

「え？」

内海は冷たくそう言い放つと、俺の横を通り教室を出ようとした。

「……………」

俺は立ち上がり、その内海の手をとった。

「なっ、何よ急に…………」

内海の言葉を遮る様に、俺は有無を言わず内海の体を抱き寄せる。

「!?!? ちょっ、何なのよ!! 離して!!」

内海は俺の胸の中で暴れ、必死になって抜け出そうとする。

「……内海、ごめん……」

しかし俺もまた内海の体を離すまいとし、そのままの体勢で呟いた。

「えっ?」

一瞬、内海の体の力が緩む。

「俺……クラスのアンケート、わざと出してなかったんだ」

「……どういう事よ」

「だって……俺がアンケートを出さない限り、内海が俺の所に話し掛けに来てくれるから……」

「!?!」

胸の中に蹲っていても分かった。耳の裏まで内海の顔は真っ赤に火照る。

「ば、馬鹿な事言わないで!! 離してよ、もう!!」

内海は再び腕に力を込め、胸の中から逃げ出そうとする。

「……やだ。なんか今、内海と離れたくない気分……」

「!! やだってばあ……。もうっ……」

内海の耳は高熱を帯びているのでは無いかという程に赤みを増し、両腕も彼女の意味とは反し力が抜けてゆく。

「内海……」

「……何よ」

俺は内海を胸から離すと、今度は首を支え接吻を交わした。

「!?!?」

始めは抵抗していた腕も今度は完全に力が抜け、だらりと垂れる。

「……口、開けて」

俺がそう囁くと、内海は頑なに閉じていた口を開いた。

「」

暫くして俺は唇を離し、内海の顔をじっと見つめる。

内海は、自ら体を俺に預け、再び顔を胸元へと蹲らせた。

「も、持貫くん……………」

「……………何？」

「……………も、もう……………一回……………」

。

俺は内海の頭に腕を回すと、内海からは絶対に見えない位置で笑みを浮かべた。

そしてもう一度、唇を交わす。

俺にキツネの話は必要無い。何故なら、この世に手の届かない葡萄など無いからだ。

第4輪『神の逆鱗』

「いやー、今マジで幸せだよ」

「うわっ、出たよ！ ふざけんなバーカ！」

教室の角から聞こえてくる、騒々しい男子達の恋愛話。彼女のいる男ののろけ顔に、彼女のいない男達が罵声を浴びせるという良くある風景。

「駿一お前、この前彼女と喧嘩したって言ってなかった？」

「いや、すぐ仲直りしたよ」

北浦駿一。ストパーのかかった直毛、割と綺麗な肌。まあ……俺程でないのは当然だが、イケメンかと聞かれれば首を横に振りはない。人当たりも良く、そこそこに女子からモテてもいるのだろう。そこそこに。

第4輪『神の逆鱗』

その彼女、加西美里。かさいみさと こちらはまあ、お世辞をフルに使わなければ可愛いとは言えない。ボサボサの髪にニキビだらけの肌。

しかしこちらも周囲への顔は良く人気があり、何となくクラス女子の中心的ポジションに就いている。

「……………」

俺はポケットから携帯を取り出し、二年三組のクラスサイトのページを開いた。

読むに耐えない誹謗中傷も、ただ単に健全な交流を図ろうとするこういったサイトも、教師や大人達からすれば結局は“裏サイト”というカテゴリーにひとくくりにされるらしいが、こういったクラスサイトはただ単に交流を図ろうとしているだけで、生徒達の間

は普通に浸透している。まあそんな事は今はどうでも良くて、まず俺は女子のプロフィール一覧のページを開いた。

クラスサイトと言っても結局は単なる娯楽で、クラス生徒全員にプロフィールや日記を書く事を強要するものではない。むしろこのサイトの管理パスワードどころかURLすら教えてもらっていない生徒すら中にはいるのだが、彼氏がいたり彼女がいる様な奴は大抵この手の企画には積極的に参加しているものだ（俺は公式には彼女無しだが、一応参加はしている）。

加西美里プロフィール

【HN】みさ

【性別】シユンの女><

【誕生日】私 10/16 二人 6月18日

【髪型】シユンのために髪のはす*

【好きな男性のタイプ】優しくて、思いやりあつて、ばかちんで可愛くて、でもカッコよくて、みさの事だけを好きでいてくれる、シユンだけ><

【ここだけの話】しあわせだー。うはー*

……………なんなんだ、こいつは……。いや実際、今の時代どこのクラスのページを見てもこんな奴ばかりなんだが……。大体、こいつ前々回ぐらいに北浦と喧嘩別れした時、他の男に告白してたんじやなかったか？ それはあっけなく振られたらしいが、だからって今ここでこういう風になっているのはとても不愉快だ……。

俺は微かな頭痛に襲われたりしながら、加西のプロフィールを眺め終えた。

（……酷い。本当に、こういう女の現状を目の当たりにすると三浦美穂みたいな女が恋しくなる。よし、今日は奴に電話してやろう）

その時、加西と北浦が俺の机に突っ込んで来た。

「もっ、持貫、悪い！」

「玉くん、ごめーん！」

二人は、ただ単にじゃれ合っていた。加西が北浦の首筋をくすぐり、北浦がそれに悶えながら対抗する。

周囲の目も気にせず愛情表現に走る二人の姿。微笑ましくあるべきはずのそれは、何故か不愉快だった。

（……加西が可愛くないのも、北浦がそんな奴を本気で好いているのも、その所為で加西が変に勘違いして図に乗っているのも、全てが癪に障る。気分が悪い……………）

「あ、いや別に」

俺は愛想笑いを浮かべながら、何食わぬ顔でズレた机を元に戻す。

（……今の内、そうやって騒いでろ。加西、北浦。そうしていられるのも今の内だ……）

そして今度は誰にも見られない様にして、先程とは違う種類の笑みを浮かべた。

（……………神の裁きを見せてやる。お前らの低レベルな交際もこれまでだ…………）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7096f/>

百輪の華

2010年10月10日01時54分発行